

森林環境教育（森林ESD）プログラム分析シート

団体名： 岡山県西栗倉村教育委員会

プログラム名： 『村のすごい！』を見つけよう ふるさとを元気にするESDプログラム

プログラムの目標	西栗倉村は今“百年の森林構想”をもとにスギやヒノキの人工林を生かした持続可能な村づくりに全力で取り組んでいる。 本プログラムは、西栗倉村の人工林や天然林等の森林を中心に村の特色ある自然環境や人材を生かした体験活動を通して、子どもたちの生きる力・探究する力を育てるものである。村内の子どものために開発したプログラムである。
----------	---

プログラムの概要	本プログラムは村の豊かな自然環境として、“天然林エリア” “人工林エリア” “沢エリア”を用意して子どもたちの自然体験の場としている。 また、“ふれあいグッズづくり”や“ふるさと元気給食”を通して地元の食材等や村の人と触れあう活動を提供する。 体験活動の後には、子どもたちが活動から学んだことを自分たちなりに表現しまとめる。そしてそれを元に子どもたちは村の人と交流し、お互いに学び合う活動を行う。 このように本プログラムでは、体験・表現・交流の場を設定し、それらを連動させる学びに特長がある。
----------	---

プログラムの展開

時間数	プログラムタイトル	
	活動内容	指導・支援の方法、ポイント等（教材等）
0.5	オリエンテーション	
	活動テーマを知らせる 各種体験活動、表現まとめ、発表・交流会の活動の流れを知らせる 活動に取り組むための子どもたちの心がまえ、諸注意を伝える	班編成はあらかじめ知らせておく 班で協力して可能な限り子どもたちの力で進める活動にしていこう 特に野外活動時において、危険物箇所、水分補給等
0.75	ふれあいグッズづくり	
	班ごとに村の人と一緒に簡単なものづくりを行う つくりながら子どもと村の人が自己紹介しあい交流する できあがった作品を紹介しあう	西栗倉村の間伐材の端材を使った“森のかけら首かざり”をつくる 村の人がつくり方を教える
0.75	ふるさと元気給食	
	西栗倉村で提供している“ふるさと元気給食”を参加者と給食食材の生産者、調理者が一緒に食べながら交流する	給食内の地元でとれた食材を紹介する 食材生産者が食材を育てる思い、子どもたちに対する思いを語る
1	天然林エリア（森林体験活動）	
	村の最北部にある若杉天然林（ブナ、ミズナラ、トチノキ等二百種類の樹木、多くの野鳥、沢にはイワナ）で班ごとに沢で遊んだり、森のおくりものビンゴ（五感ビンゴ）をおこなう	自然体験ボランティア（村の人）による見守り 子どもたちの必要があれば対応する 子どもたちが班ごとに自主的に散策したり、ゆったりと過ごしたりすることを大事にする
1	人工林エリア（森林体験活動）	
	高性能林業機械を使ったスギやヒノキの間伐作業を見学する 一人ひとりがノコギリで間伐材の丸太切りや枝打ち体験をおこなう	安全管理に十分留意する ヘルメット着用（機械見学时、体験作業時） 自然体験ボランティアや運営スタッフで人員を確保する 間伐作業の目的や機械化のメリットについて説明する

プログラムの展開		
時間数	プログラムタイトル	
	活動内容	指導・支援の方法、ポイント等（教材等）
1	沢エリア（森林体験活動）	
	天然林から人工林を流れる沢の中を班で助け合いながら歩く “百年の森林”に入り、五感を使い何かを感じたり見つけたりする体験をおこなう	安全管理に十分留意する ヘルメット着用 自然体験ボランティアや運営スタッフで人員を確保する 沢歩きコース設定、水量等を事前に十分把握しておく 樹齢70年のスギ林で木に触ったり、においをかいだり年輪を数えたりする体験を大切にする
1.5	まとめ資料づくり ＋ 練習	
	班ごとに各自が見つけた”村のすごい”を出し合い、その中から一つを決め、写真を選び、キャッチコピー（見出し）を考え、1枚の模造紙にまとめ、発表・交流会で1分間プレゼンができるように練習する	できるだけ子どもたち自身でまとめができるように大人は見守る 各体験エリアで各班ごとにデジカメですごいを保存 模造紙、紙、マジック、糊、ハサミ等は用意 資料ができた班から発表に向け練習をおこなう
1	発表・交流会	
	見つけた”村のすごい”を発表交流しよう 各班ごとに1分間プレゼン 各班ごとにポスターセッション 村の人と交流	発表交流会は、プログラムの参加者、スタッフ、ボランティア（村の人）及び自由参加の村の人である ポスターセッションで村の人と子どもたちが自由に交流する時間を確保する 交流会の全員で意見交換をおこなう
0.5	活動をふり返って	
	活動全体をふり返って 自分が学んだこと成長したことをふり返り話し合う	体験活動で感じたこと見つけたこと 班で友だちと活動して思ったこと 活動の前後で自分が成長したこと等について出し合う

森林環境教育 の視点	1 感性的経験	感性的な内容－森林の感覚的把握や美的把握、畏敬の念など			
	2 自然的特性	森林の自然的特性に関わる内容－植物や動物の生態など			
	3 多面的機能	森林と人とのかかわりに関する内容－森林の働き、保安林など			
	4 現状・課題	森林の現状に関する内容－森林の荒廃、人手不足など			
	5 管理・維持	森林の管理・維持に関する内容－森林整備、育成、維持、管理など			
	6 歴史・文化	森林とのかかわり方の歴史－その土地での歴史、薪炭林、炭焼き			
項目番号	活動の分析（森林環境教育の視点） 上位3項目				
1 感性的	天然林エリアでは、森のおくりものビンゴ（五感ビンゴ）での活動を通して、視覚、聴覚、触覚、嗅覚を通して天然林と触れ合い楽しむ経験を行うことができる。また、沢エリアでは、実際に沢の中に入り沢の中を歩きながら、その楽しさや怖さを体験する。子どもたちからは「沢歩きは遊園地よりも楽しい！」という返事が返ってくる。				
3 多面的	天然林と人工林、また沢の三者を一度に体験することで、人と自然との関わり方の違いを比較しながら体験を通して学ぶことができる。すなわち、天然林では人が手を付けず自然のままの大事さ、人工林では人が手を入れて管理することの大事さ、そして沢では楽しみとしての森林の体験である。				
4 管理 維持	人工林エリアでは、人が植林した森林を大事に管理していくことの大事さや苦労・工夫について体験を通して学ぶことができる。具体的には、大型林業機械での間伐作業の見学や実際にノコギリをつかったの枝打ちや間伐体験である。				
ESDの要素 （生きる力）		能力	1 批判的に考える力	態度	5 他者と協力する態度
			2 未来像を予測して計画をたてる力		6 つながりを尊重する態度
			3 多面的、総合的に考える力		7 進んで参加する態度
			4 コミュニケーションを行う力		
項目番号	活動の分析（能力・態度の視点） 上位3項目と実施後の変化				
3 多面的	森林の一部の側面だけを体験するのではなく様々な森林での体験活動が、森林の持つ多面的な機能を知るきっかけになる。具体的に天然林エリアでは生物多様性保全機能、水源涵養機能について、人工林エリアでは物質生産機能について、沢エリアでは保健・レクリエーション機能についてなど、体験的に多面的・総合的なものの見方や考え方を育む機会を提供することができる。				
4・5 コミュニケーション ・協力	体験－表現－交流の場を設定する本プログラムは、子どもたちがチームを組み、協力して村での自然体験を行い、チームで協力して自分たちの考えをまとめ、村の人と発表・交流する活動を行うものである。子どもたち同士のコミュニケーションや協力なしに活動は成立しない。また村の人とコミュニケーションをはかりお互いに学び合うことでさらに学びを深め発展させることができる。				
6 つながりを尊重	本プログラには、様々な機能を持つ森林（天然林、人工林、沢）や人と自然との関わり（間伐体験、木工体験、ふるさと元気給食）、人と人の関わり（チームでの交流、食材生産者との交流、村の人との交流）を含んでいる。これらは、個々に分断された存在ではなくお互いに関連し合い影響を及ぼし合っている。本プログラムは、人やもののつながりについて考え、それを尊重する態度を育てる機会を提供することができると思う。				
実施後、参加者の変化	参加した子どもたちは ・人と話すのが苦手だったけど、初めて出会う人でも仲良く活動することができた。 ・先生たちがいなくても、みんなと協力して団結することが大切だと思った。最後までやりぬくことができて、自信になった。 ・森を大切に森を愛する気持ちは、全国のみんなと一緒なんだということがわかった。 また参加した大人は ・アクティブラーニングを取り入れた学習が参考になった。 ・活動に地域の人々が大きく関わっていたことが参考になった。				

学習指導要領との関連（上位3項目）		
教科	項目	学習内容
総合的な学習の時間	探究的な学習	課題を持ち、体験を通して情報を収集・分析し・まとめ表現して交流するという探究する学習の方法を学ぶ
5年 社会科	森林資源の働き	森林資源の持つ機能や働き、また地域の人々の生活や仕事を通じた関わりを、体験を通して学ぶ
4年 理科	生命・地球・季節と生物	季節ごとに動物や植物の変化の様子を調べ、それらの活動と環境との関わりについて、体験を通して考える
プログラムでの学校との連携（取組内容）		
本プログラムのベースは、西栗倉小学校で行われている”ふるさと元気学習”である。この学習はふるさとの自然や人と触れ合い、子どもたちの生きる力・学ぶ力を高め、ふるさとを元気にしていくものである。また、体験・表現・交流の場を設定しそれらを連動させるものである。 このようなふるさと元気学習の方法を用いて、西栗倉村の自然環境や人材を生かすプログラムとして開発した。本プログラムを構成する小プログラムは単体としても実行することができる。必要に応じて、小学校の子どもたちの学習プログラムとして活用することが可能である。		
プログラムでの地域との連携（取組内容）		
本プログラムを実行するために、ボランティアとして以下の通り地域の人々と連携した。 ふれあいボランティア： ”ふれあいグッズづくり”で首かざりをつくる際に、参加者に作り方を教える役割を担う 自然体験ボランティア： 参加者が森林体験活動を行う際、活動を見守り励まし必要に応じて対処する役割を担う 給食食材提供者： ふるさと元気給食を参加者と一緒に食べながら、食材を育てる思い子どもたちへの思いを語る		
プログラムの今後のめざす方向・展開		
本プログラムの狙いは、西栗倉村の特色ある自然環境や人材を生かし体験活動を通して、子どもたちの感性、生きる力、考える力などを育てることを第一義の目的としたものである。 今後は西栗倉村の環境モデル都市としての取組みや、百年の森林構想に基づく持続可能な村づくりの取組みなどの具体例を、子どもたちにもわかりやすく学ぶことができるプログラムをつくることが望まれる。 このように子どもたちの能力や資質を育てるプログラムに加え、持続可能な社会の実現に向けた知識や技術を学ぶプログラムの両者を持つことで、総合的にESDを学ぶことができる環境が整うと考える。		
現状での課題など		
上記のプログラムは、現実的には学校教育で活用される可能性が高い。学校関係者、行政担当者、地域の事業者の三者が連携して、西栗倉村の特色あるESDプログラムをつくることが望まれる。 これまで西栗倉村でのESDの取組みは、ふるさと元気学習として学校を中心に存在してきた。今後は教育関係者が、よりESD（ふるさとを元気にするESD）としての認識を高める研修を重ねる必要がある。さらに地域住民に対しても、村の取組みを理解しながら持続可能な社会づくりの意識を高める啓発活動が必要だと思われる。		
他地域の取組みを知りたい ESDに対する住民の意識や浸透の度合いはどうか ESDを地域で進めるための仕組みづくりについて		